

圏外のアンテナ

[頑固な色]の巻

先日、新橋駅のホームで車両に片足をかけた瞬間、後ろから誰かにひじをつかまれた。あせって振り向くと、髪を紫に染めた高齢の女性が、これ山手線じゃないですよね？と、不安そうに地団駄（じだんだ）を踏んでいる。

ふいに、ピンときて、ああ、大丈夫、乗ってくださいと、その人を車内に引きずり込んだ。走り出した車内で、奇妙な色だが、山手線に間違いないと説明。彼女はほっとした表情を浮かべた。

先月から山手線に1時間に1本ずつ、赤レンガ色の車両が走っている。東京駅開業百周年のイベントらしい。だが山手線イコール緑色と長年認識して来た人にいきなりの茶色は、晴天の霹靂だろう。

わたしたちも、学生時代は山手線をミドリムシと呼んでいた。その頃からずっと緑色なのだから、予想外の色の登場に、あわててしまう人もいるだろう。

日本人は、古来より、色にはデリケートな感性を持っていた。だが今、記号としての色の選択は、なんだかグズグズ。もっと厳格であっていいと思うのに…。

例えばサムライブルー。あの爽やかな青色に恨みはないし、背中にカズの名前の入ったレプリカだって持っている。だがなぜ、サッカー代表のユニフォームが青、野球がグレー、バレーボールが黒なのだろう。

ナショナルカラーという視点で考えれば、日本は絶対的に、赤と白である。ブラジルが、どんなスポーツでもカナリア軍団であるように、日本のチームカラーに、青やグレーや黒の入りこむ余地などないはず。

同じように、色を記号と捉えれば、山手線は百年たっても、緑色なのである。

人は何かを新しくしようとして、いつも一番大切な何かを失ってしまう。

=2014年11月18日掲載=



山手線に出現した、赤レンガ色のラッピング・トレイン